

「サイ・キサラギを周回軌道刑に処す。以上」

西暦2300年代の地球において、周回軌道刑は死刑より重い極刑に定められている。

周回軌道刑を命じられた囚人はまず等身大のカプセルに入れられる。ハッチが閉じれば当然真っ暗、身じろぎする隙間もない。閉暗所恐怖症なら五分ともたず発狂する。

これだけでも地獄なのに、囚人を詰めたカプセルポッドは宇宙に廃棄され、永遠の闇をさまよい続けるのだ。

一応全身に繋いだ管で栄養補給と排泄はできるが、かえって生殺しが長引くだけ。

俺はその宣告をしらけて聞き流した。

「待ちくたびれましたよ。三年も拘留してやつとこさ確定ですか」

ついでにあくびを一発かます。

「で、俺専用の棺桶……カプセルポッドはどこですか」

喋んのは久しぶりだから、錆びた舌を剥がして回すのに苦労した。

官僚が嫌な顔で咳払いし、居丈高に顎をしゃくる。思わず目を疑った。

官僚の視線の先に待ち構えていたのが、小型の潜水艦……深海探査艇によく似たフォルムの宇宙船だったから。確か

にコンバクトだが、カプセルポッドに比べたら豪邸だ。官僚が恩着せがましく続ける。

「船内には一年分のビタミン剤とドライソープ、およびドライシャンプーが積み込まれている」

「至れり尽くせりですね、罪人風情に」

「全身に管を繋がれる方がよかったですか」

黙って肩を竦める。看守に挟まれてタラップへ赴けば、宇宙船の前にほっそりしたシルエットがたたずんでいた。

「アンドロイドか」

すぐにわかった。人間には存在しない鮮やかなピーコックグリーンの髪と瞳は、人造人間の特徴だ。

アンドロイドは優雅な身ごなしで挨拶した。

「当船の備品です。よろしくお願ひします」

流刑船には備品が積まれていた。聞いてない。

首をねじって官僚に説明を促しや、キザつたらしい髭をねじってこういいやがった。

「君は確かに罪人だが、軍属時の貢献度を鑑みておまけを付けてやったんだ。元上司にあたるマル博士の意向でもある」

「餓別ってヤツですか」

「独房ではぼちぼち精神を病み始めてたみたいじゃないか」

「だったらハツカネズミでも積んでくださいよ」

「動物は話し相手にならない」

「人間と話すのは煩わしい」

「だからアンドロイドにした。感謝したまえ」

ドヤツと踏ん返り返った顔をぶん殴りたくなる。官僚とは会話が成立しねえ。

そして船は発射された。

「ライカ犬の気持ちがあわかった。動物実験反対」

窓の外の青い星を眺めて呟く。

今は遠い故郷、俺の地球。ちつぽけでまん丸い星。

ただ見るだけ、手が届かないんじや生殺し。この罰を考えた政府の連中はそうおもったに違いない。

お生憎様、地球になんて綺麗さっぱり未練がねえ。穢土えどを離れていつせせいせいする。

闇を切り取った丸窓に半ば透けて映っているのは、痩せぎすで冴えないモンゴロイドの男の顔。険を帯びた切れ長一重の目元は眼鏡でもごまかせない。三年に及ぶ独房暮らしのせいで髪はボサボサ、むさ苦しい無精ひげが散っていた。

「剃刀は？」

「どうぞ」

アンドロイドが恭しく剃刀を献上する。俺は小さく頷いて受け取り、洗面台の鏡で髭を剃る。

「ふー。さっぱりした」

なめらかなになった顎をなで満足し、寝かせた刃を見下ろす。投獄中は刃物なんぞ持たせちやもらえなかった。理由は簡単、自殺を警戒してやがるんだ。

「用がお済みでしたら回収します」

俺の視線を何と思ったか、アンドロイドが抜け目なく申し出る。ムツとして剃刀を突っ返す。

「個体識別コードは」

「A-102131-XYです」

「じゃあ備品って呼ぶな」

「お好きにどうぞ」

控えめにはにかむ。表情豊かなのが癪だ。

あらためてまじまじ見直す。ユニセックスとでもいえばいいのか、無個性に整った顔立ちは作り物めいて薄ら寒い。睫毛の長さすら均等だ。

ミディアムショートの髪は人間にはありえないピーコックグリーンで、同色の虹彩はメタリックな輝きを放っていた。「備品の分際で服を着るのか」

「マル博士の指示です。全裸は見苦しいと言われました」

「無毛のアンドロイドでも？」

「性器を露出して歩くのはいかなものか」と指摘をうけました」

率直に疑問を述べれば、備品が真面目に返す。

マルは俺の元上司、どうでもいい情報を付け足すなら染色体XX。俺を慮ったつてより、自分の美意識を優先したんだろうな。

XYつて事は男型か……女ならよかつたのに。しかしまあ、使えない事はない。

こうして俺と備品の日々が始まった。

起床してから就寝するまで、俺は何もやることがない。

言うなりやここは宇宙船仕様の独房で、あらゆる娯楽が没収されている。手元には本の一冊もない。

俺に許された趣味といたら窓から地球を眺めるのと……

「何をなさつてるんですか？」

「ラジオなしラジオ体操」

布で計器を拭いていた備品に聞かれ、そっけなく答える。

膝を曲げて伸ばし曲げて伸ばし、お次は両手を組んで裏返し伸びをする。

一連の動作をしげしげ観察し、備品が無表情に口を開く。

「その行為には一体どんな生産的な意味があるのでしょうか」

「非生産的な暇潰し……と見せかけ、運動機能の衰えを防げるからまるきり無意味つて訳でもない」

以前も……というか、三年前まではよく気分転換にやつていた。研究に行き詰まるとおもむろに席を立ち、ラボで体を動かす。そしてまたデスクワークの再開。

適度な運動のあとは食事の時間だ。瓶を振つて錠剤を二粒とりだし、口に放り込んでバリバリ噛み砕く。無味乾燥に尽きる。

「マル博士からメッセージを受信しました」

「繋げ」

「了解しました」

内容物を嚙下して促す。備品が瞬きする。

瞼の下から露出した瞳の色が微妙に変化し、二条の光線が放たれた。備品の瞳から虚空へ投影されたのは、懐かしい女上司の立体映像だ。

『久しぶりね』

気取つた声音が鼓膜を叩く。虚空に浮かんでいるのは白髪を上品に結い上げたコーカソイドの老婦人。

俺はお愛想程度に口角を上げる。

「かれこれ三年ぶりですか。すいませんね、投獄以来時間の感覚がわからなくて」

『嫌味ねえ。見送りに行けなかつたから拗ねてるのかしら』

「気にしてませんよ、お忙しいんですよ。マル博士もご愁傷様ですね、俺の穴埋めでプロジェクトを任せて」

『おかげ様で充実した日々を過ごしてるわ。宇宙の旅は快適？』

「最低限の生活環境を整えてもらってたんで万事恙なくやっています。あの窓がない狭く苦しい独房よりマシですね、なにより自殺防止用のクツションが四面に張られてないのが快適だ」

椅子にかけて足を組む。

立体映像の上司が嘆かわしげに首を振る。

『自殺したいなら好きにどうぞ、止めないわ。ただハッチを開ければいいだけだから簡単でしょ、星海の藻屑になれるなんてロマンチックじゃない』

「お空のお星さまになつたら見付けてくれますか？」

『望遠鏡越しに合図をくれるなら』

「せいぜい汚い火花になって弾けてやりますよ」

『楽しみだわ』

「そんなこといって、マジに死なれたら困るくせに」

『自意識過剰なこと』

眼鏡のブリッジに指をあて、毒気を含んだ表情を遮る。

「間違ってますか？ まだ利用価値があるから、流刑なんて回りくどい方法をとつたんでしょ。じゃなきゃとつとと静脈注射で処分してる」

図星を突かれたマル博士が、批判がましい一瞥を投げてよ

こす。

『個人的には自白剤で片が付いてほしかったんですが』

「さじ加減が難しいですよ。失敗すりや国で二番目に優秀な頭脳をぶっ壊して廃人を作るだけだ」

『今は一番よね』

……くたばれ。

『思い出しました、自白剤の注射はあなたが大暴れして取り止めになったのでは？ 舌を噛むと脅したのをお忘れかしら』

「宇宙に捨てるのは悪い案じゃないってのは認めます、現状考えうるかぎり最善の落とし所だ。俺は国家転覆を企む危険分子だから地球にいられちゃまずいですよね？ その点大気圏外なら安心安全、スパイと接触して情報を流す恐れもない」

饒舌になつてる自覚はあった、そもそも人と話すのが久しぶりなのだ。ただの映像に過ぎないとしても、多少興奮しているのは許してほしい。

元上司が話題を変える。

『備品に名前を付けてあげた？』

ムツとする。

「何故俺にアレを。いやがらせですか」

『長旅には話し相手が必要でしょ』

「ハツカネズミとトレードしてください」

『穴が小さすぎるのでは？』

「……お見通しかよ。さすがに後ろめたい。」

『恥じることはありません。三年も独房暮らしだった健康な成人男性が、人より美しく従順なアンドロイド相手に考える事は大体同じです』

「下の世話をさせるために積んだんですか」

答えを濁して悪戯っぽく微笑むマル博士に対し、おどけた素振りですぐ肩を竦め、率直な感想を述べる。

「家電を使ってオナニーするみたいなものです。反応ないんじゃない気がします」

『アンドロイドには学習AIが搭載されています。エモーションナルなりアクションが欲しいならあなたが直接教えてあげてはいかが？』

なんだか気分が悪くなってきた。懐柔を企んだところで無駄だとわからせたい。

大きく息を吸い、立体映像の博士を睨み据える。

「身の周りの世話なら間に合ってます。体の洗浄はドライソープとドライシャンプーですむし、栄養補給はビタミン剤二錠。俺が生きてくのに必要なのはたったこれだけです。人型の粗大ゴミはいりません、今すぐ真空に蹴り出したい」

『在庫は一年分。それが切れたらどうするの、老廃物がた

まるわよ』

「備品、通信遮断」

『待』

「了解しました。失礼します、マル博士」

備品が臉を下ろして通信を切る。俺は深々と息を吐いてコンソールに突っ伏す。

我々は本能を否定できない。人間には性欲がある。

予め断つとくが、俺は清廉潔白な人間じゃない。投獄前は歓楽街で女を買ったりしていた。独房にぶちこまれてからセックスはしてない。できるわけもない。

現在。

地球を遠く離れた周回軌道の流刑船スホイライの中で、俺は人間を完壁に模した備品と向き合っていた。

備品は備品でも自立思考ができる働きの備品だ。四六時中計器の手入れなど掃除だのとこまごま動き回る背中に、椅子に後ろ向きに跨って質問を投げる。

「お前さ。穴は付いてんの」

「どこの穴でしょうか」

「肛門」

「ごぎいます。排泄はできませんが」

「なんで出せないのに付いてんの」

「開発者の遊び心でしようか」

「こだわりの匠か。見えないところにも手抜きをしない心意気はあつばれだな」

アンドロイドは用途によってデザインが異なる。幸いにして備品にはケツの穴がもうけられていた。

俺が「横になれ」と命令すると、備品は掃除を中断し体ごと横を向く。

そうじゃない。でも今のは俺が悪い、アンドロイドは人間の機微に疎い。行間を読むなんて高度なテクは使えない。

ぶっちゃけめんどくせえ。

「あー、ベッドに仰向けになれ」

ぞんざいにコマンド変更^言。今度は正しく意を汲んで、備品はベッドに仰向けた。白衣を脱ぎ、眼鏡を外し、無垢な顔の備品のズボンを脱がしにかかる。

「何をするんでしょうか」

「性欲処理」

備品が眉を八の字にする。